

平成27年度第2回岐阜県図書館協議会議事録要旨

- 1 開催日時 平成28年3月7日(月) 午後1時30分～午後3時30分
- 2 開催場所 岐阜市宇佐4丁目2-1
岐阜県図書館 2階 特別会議室
出席委員 委員長 田村 弘司
副委員長 薬袋 秀樹
委員 梶井 芳景
委員 春日井 一朗
委員 片山 誠吾
委員 金森 さちこ
委員 福士 秀人

3 議事要旨

(1) 平成28年度県図書館の運営について

資料の収集・保存について

図書館サービスについて

県内市町図書館等への支援について

職員研修・広報活動について

(梶井委員)

始まる前に展示を見せていただいた。小さな図書館がする展示とは違うなと感じました。資料の幅や奥行きが感じられ、さすが県図書館で行う展示と思いました。眠っていたすべての資料がよみがえって、利用者の手元に届くような展示に力を入れていただきたい。

(片山委員)

来年度の館長サミットについて何か決まっているのか。

(堀江企画課長)

当館での研修の機会に、市町村の役割等について互いに再確認いただくとともに、こういった役割が必要でないかという交流をしたい。

テーマは決まっていないが、4月になったら日程調整のうえ、案内をさせていただく。

(田村委員長)

郷土作家については検討しているのか。

(片桐館長)

郷土作家についてはいろいろ基準を考えた。まだ正式に決まっていないが、スペースが限られているので、企画展示室での展示は、常設展と企画展で行いたい。

常設展は物故された作家で小説、児童小説を中心に選びたいと考えている。

その他の評論、詩であったりそういった方々については、常設展ではなく企画展で行いたい。

色々なアドバイスを受けながら決めたいと考えている。

(薬袋委員)

「情報共有発信」というコンセプトが加わったが、これは、これまでの使命をさらに発展させる優れたコンセプトだと思う。

これを進めるには、ウェブサイトや電子メールの活用が効果的である。特にウェブサイトによる情報発信が重要だ。

県図書館のウェブサイトへのアクセスを増やすには、市町立図書館のウェブサイト、それもトップページに県図書館のウェブサイトへのリンクを貼ってもらうことが必要だと思う。

同様に、県図書館のウェブサイトのトップページに国立国会図書館へのリンクがあっているのではないかと。それぞれがリンクを貼ることが必要ではないかと。

今後、3つの分野の資料が充実することになるが、これを十分活用してもらうために、それぞれのユーザーである関係団体において、各団体から、その資料の項目にリンクを貼ってもらってはどうか。

他方、県立図書館では、海外情報リンク集、障がい者支援関係リンク等のリンク集を作り、県立図書館のウェブサイトに掲載し、それを通じて、自館の3分野の資料にアクセスできるようにしてはどうか。

関連して、協議会委員への広報として、「協議会ニュース」のようなものを年3回程度メールで送っていただければありがたい。ごく簡単なものでよい。

「図書館活用ハンドブック」を作成されたとのことだが、大変よいことだと思う。十分活用してほしい。後で配っていただけるとありがたい。

(片桐館長)

リンクの貼り方についても具体的に館長サミットなどで話をしたい。

平成27年度パンフレットを作成したが、ホームページにパンフレットの内容を載せたいと思っている。

(金森委員)

県図書館がどこに向かっていくのか、明確になってきている。

清流の国ぎふづくりの一翼を担う情報共有が大切なんだということ、郷土を知り学び郷土への愛着を育む機会を創出することが今の子供たちに大切ではないかと話を聞いていた。

数字を競うのではなく、県全体の図書館として誇りを持つことが大事であると思うが、その中で一番弱いところは、情報発信の仕方ではないか。県図書館の良さをどのように発信するか。そこにもう少し知恵を拝借して、発信の仕方を考えていくと県民によさが伝わるのではないか。

児童作家を呼ぶ際に、原画を借りて飾るとか、サインをしていただくとかするようなことを考えると、集客が見込めるのではないか。

(片桐館長)

具体的なアイデアありがとうございます。

絵本を特集することがあったら工夫をさせていただきたい。

図書館に注目が集まっている中PRをどうするかで悩んでいる。

図書館に対するイメージは、学生がいる、文学書中心というイメージがどうしてもあるので、利用者にそうではないことをどうやって伝えるのか、提案があれば参考にしたい。

(金森委員)

一つのアイデアですが、種明かしをせずに、「**特** **定** **夕** **イ** **ト** **ル**」という絵本を持ってイベントに参加くださいという案内をすればいいのではないか。

読者の意見を取り入れ、初版本から絵の一部が変更された図書もある。

(福土委員)

大学図書館ともできるだけ連携をさせていただければと思う。

情報発信の点で、SNSとかいろいろな方法を使い分けながら若年層に伝えていけるとよい。

ウェブの話が出たが、パソコンの画面からだけでなく、携帯端末からも自由に使えるようになると利用度も上がりやすい。

携帯端末から図書の予約が簡便にできるとよい。

郷土の話が出たが、まち・ひと・しごと創生の関係で地域活性化が大きな問題となっている。

岐阜市は人口の流出はプラスになっているが、地方都市の懇談会に出ると文化的というものが住むことの大きなファクターとなっている。

在宅でも本が借りれることも、お母さんたちにとっては重要なことなので、強化していただくとよい。

故郷に帰りたいときの県の現況などを図書館を通じて情報収集できるとよい。

(片桐館長)

スマホ版については検討させていただく。

地方のまち・ひと・しごと創生の関係では、図書館は基本的なインフラで、県下の図書館のないところにもサービスが届くように工夫しなければならないと思っている。

(堀江企画課長)

スマホ版のサイトについてですが、蔵書検索、新着資料、お知らせ一覧など簡易なものがトップページの下の方にあります。スマホ版の充実が課題と思っています。

(田村委員長)

今の若者たちはスマホばかりなので、大学内部のホームページもスマホ版にしないとみてもらえないという状況です。

(福土委員)

ホームページの上の方にあるとよいので、改善するとよい。

(田村委員長)

見やすい、使いやすいものにしていただければと思います。

(梶井委員)

メディアコスモスや県美術館など派手なものに目がいく。

県図書館は地味な存在であるが、名誉館長を設けられたので、うまく広報活動をしていただければと思う。

(堀江副館長)

3. 1 1 のパネル展示やセミナーが行われ、岐阜新聞で取り上げていただいた。

個別イベントにコラボして関係の図書資料を展示し、参加者にはブックリストを配布したり、地道に行っている。

(田村委員長)

図書館で行われた行事についてメディア出ていることがあるが、図書館で行われた行事について、図書館協議会のメンバーが後から知ることが多い。

県としての広報パーソンとして図書館を応援できたらと思っているので、タイミングよく情報をいただきたい。

いいことを行っている、意外と地方に行くところ知らないことがある。

市町の図書館にも情報が届くとよい。

(片桐館長)

今年の反省として、委員のみなさんに情報が届いていなかった。

今までと異なった募集の仕方でも成功したと思えることがあった。

今年イベントを実施するときにメールでの受付をしたところ、若い人は確実にそういった手段でアクセスをするということが分かった。

すべての手段が効くような方法で募集をしないといけない。広報もそういった方法でなければいけない。

(薬袋委員)

「図書館は小説があるところだ」という先入観があるという話があったが、何十年もそのような先入観を克服することに取り組んできたつもりである。新任図書館長研修の最大のテーマもそれである。

「これからの図書館像」を2006年に発表し、「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」に、「地域の課題に対応したサービス」を加えたが、図書館の現場で具体化する努力が弱い。

図書館は地味な組織であり、社会にアピールするには、ウェブサイトを活用する必要がある。図書館のウェブサイトを見る時に注意していることがある。

課題解決支援の6つのキーワード（子育て、学校教育、ビジネス、行政、医療、法律）がトップページに出てくるかどうか。今なら、地域振興や地方創生が出てくるかどうか。

ウェブサイトにもそれらのキーワードが出てくる必要がある。それによって、少しずつ浸透して行くのではないか。

この点が徹底しているのが鳥取県立図書館だが、岐阜県図書館もかなりよいレベルにある。市町立図書館のウェブサイトはその点がまだまだ弱い。県立図書館のウェブサイトを見ただけ多くの県民に見ていただくようにしたい。

県図書館のツイッターは便利であるが、人によっては情報が多すぎるかもしれないので、複数のアカウントを用いて、もう少し簡単なレベルのものも提供してよいのではないか。

<新たなステージを迎えた岐阜県図書館>

(福士委員)

図書館と美術館が隣接してあるところは、そんなに多くない。美術と本というのは深いかわりがあるので、美術館と連携する工夫をしていただけるとよい。絵本ですと原画展が興味を引くと思うのでできるだけ活用していただけるとよい。

(片山委員)

子育て世代に対する支援については、学校に勤めるものとしてありがたく思っている。

児童図書研究資料等とあるが、保護者と話していると子育てそのものに悩んでいる人が多い。子育てそのものの図書や資料はあるか。

(堀江企画課長)

美術館との連携についてですが、今年度展覧会に合わせた資料展示を3回行い、美術館にブックリストを置かせてもらった。次年度についても引き続き進めていきたい。

(片桐館長)

子育て世代に参考になる資料も含んでいるし、今後も集めたいと思っている。

教員関係のものも比較的充実していますし、市町村で置かれる本と見比べながら考えていきたい。

(梶井委員)

企画コーディネーターの設置について説明をお願いしたい。

(堀江副館長)

27年9月補正で予算がついて、3名の方をお願いをし、リニューアルについて助言を受けた。

新年度予算の中で、新たなるサポーターの発掘や職員研修などの意見をもらい予算に盛り込んでいる。

<平成27年度中間評価と平成28年度評価指標について>

(金森委員)

平成26年、27年、28年とレファレンス件数の目標値が同じ数値になっているが目標値の根拠を聞きたい。

レファレンスの満足度の達成率100%を超えているということは、年々利用者の方がレファレンスされなくても問題解決する力が備わってきて、それと同時に図書の配置を聞かなくわかっていくということではないかと思ってるので、目標値を同じ数値にしていると達成率は低くなっていくのではないかと。低い数値を設定することも一つの手ではないか。

(堀江副館長)

平成24年12月の文部科学省告示に基づき、平成26年度からは第二期の5か年計画

を立てた。この5か年計画の目標は変えず、目標管理をしていきたい。

(金森委員)

5年間は変えないということですね。

利用者の方がご自分で探す力が備わってきていることで好意的に受けて止めています。

行政レファレンスも増加していて、ここは評価する点ではないか。

ひょっとしたら、達成率は下がるかもしれないが、レファレンスには満足していることを重く受け止めなければいけない。数字のマジックにとらわれてはいけない。

PR隊として頑張りたいと思いました。

図書館と美術館の連携でいうと、今までの中で県民の方が盛り上がったのは「グリとグ
ラ」のコラボではなかったかと思う。

また同じようなことがあると、大勢の利用者が見込めるのではないか。

(田村委員長)

両館連携も広報が不足しているのではないかと思う。

(片桐館長)

木のおもちゃ博物館もできるので、そういったものとのコラボも考えていかなければい
けない。

(田村委員長)

ここ一帯が複合施設となっていくということですね。

(片桐館長)

トータルで人文も社会も子どもも対応できるようになるかと思います。

(福土委員)

レファレンス件数に関係するが、実際のレファレンスの中味の分析や、こういった年齢
層が聞いてくるのかもを見ていくといい。成熟度、分析を進めていただけるとよい。

きちんと利用ができているから、件数が減っているとか。

(杉山サービス課長)

評価指数のレファレンス件数は、簡易な所蔵調査を除いた調べもの調査の件数を上げて
いる。

年齢別については3年ほど前に一時分析したことがあるが、今は具体的には行っていな
い。

来館者の減少ほど、レファレンスや書庫出納は減少していない。県と市図書館を使い分けていることを実感している。

(福士委員)

来館者数、サービスの件数の比率をうまく示していただけると、絶対値では減少しても、相対値でみると利用が上がっていることが見えてくると思う。

(春日井委員)

入館者数が予想していたほど減っていないというのは、年度末までの予想ですか。

(杉山サービス課長)

来館者数は減少しているが、レファレンスの総件数はさほど減少していない。

(堀江企画課長)

入館者数は、当初3割ぐらい減少するのではと予想していたが、12月末現在の数値ですが、一日当たり10%減、1日の貸出し15.9%減、レファレンスはおおむね目標に届きそうである。入館者は減っても、レファレンスの利用は減っていない。県民に県図書館を頼りにされているのではないか。

(春日井委員)

入館者数が減少していくと予算の関係もあるので、それなりに注視していただいたほうが良いのではないか。数字は説得力がある。

郷土の紹介、郷土を知り学ぶ機会の創出に限らず、文化芸術に限らず、いろいろな分野の方を招いてやっていただけるとよい。他の分野もどんどん紹介していただけるとよい。

(片桐館長)

世間には入館者数や貸出冊数はそれなりの意味を持つ。

数字にはインパクトがあると思っている。

文化勲章を受賞された方の講演会を図書館と県博物館で共催実施した。

年末には、県博物館の企画で化石の話もしてもらった。

これらの行事の際は、普段図書館を利用していない層の方に来ていただいた。

開架や閉架でも普段動かない図書が動いた。

来年度もここでイベントをする機会を増やしていきたい。